

小学校国語科伝記教材としての「福沢諭吉」

幾 田 伸 司*

1. はじめに

伝記教材¹⁾の学習では、優れた人物の生き方や考え方に触れることを通して学習者自身の生き方を考えるといった価値目標が設定される。つまり、伝記教材の題材には、学習者の規範となるような生き方や考え方をもちた人物が採られているといえることができる。

戦後小学校教科書の伝記教材の採録は、昭和55年度の大改定時を境にして急激に減少した。しかし、戦後初期から昭和54年度まで、伝記教材は高学年を中心に各学年で2編程度以上が採録されている。伝記教材の採録が相対的に多かった昭和54年度までの期間で、最も多く教材化された人物が、福沢諭吉である。

周知のように、福沢諭吉は日本の近代化を主導した啓蒙思想家であり、明治期における日本の近代化を象徴する存在である。福沢の伝記が教材化されやすかった一因としては、『福翁自伝』という底本があり、教材化にあたってリライトがしやすかったということが挙げられる。とはいえ、咸臨丸での渡米といった逸話はあるものの、福沢の生涯は決して劇的だったわけではない。伝記教材に波瀾万丈なストーリーが必要なわけではないが、福沢の生涯は、激動する時代の中で実直に学問を志した、どちらかと言えば安定した人生だったという印象が強い。では、なぜ福沢の伝記がこれほど多く教材化されたのか。

この期間の伝記教材の全般的特徴として、以下の要素が指摘できる。

昭和40年代までの「伝記」教材の傾向は、学者や芸術家を積極的に採録して文化国家の建設を志向するとともに、近代社会の実現を肯定的にとらえ、それへの寄与を重視する方向性を示している。また、勉学、努力、利他的精神が強調され、そうした生き方を通して何らかの成功を収めた人物が採録されている。教材を通して日本人の活躍を示していることも、昭和40年代までの特徴として挙げられる²⁾。

確かに福沢の功績は「文化国家の建設を志向」し、「近代社会の実現を肯定的にとらえ」た当時の伝記教材観と合致する点が多く、その功績自体が教材として要請された要素と合致していたと考えられる。また、不遇の境遇から学問を通じて立身を遂げる構図は伝記教材で好まれるパターンであり、こうした要素も福沢諭吉の教材化を促した一因として考えられよう。

では、実際には福沢諭吉のどのような点が国語教科書で評価されたのか。教材で彼はどのような人物として描かれており、30年にわたる採録期間内で提示された福沢諭吉像に変容はなかったのか。本稿は、こうした問いを踏まえ、戦後復興期から高度成長期にかけての国語科伝記教材を代表する福沢諭吉を通して、この時期の教科書がどのような人物像を規範化して描いているのかを検討する。

* 鳴門教育大学大学院人文・社会系教育部准教授

2. 戦後小学校国語教科書における福沢諭吉伝記教材の採録状況

戦後小学校国語教科書に採録された、福沢諭吉の伝記を題材とする教材は、昭和26（1951）～54（1979）年度の期間に、全13社中10社の教科書で、17編が延べ37回採録されている。学習指導要領の改訂に基づく教科書の大改訂ごとに時期区分を行い、それぞれの時期で採録数が多い人物をまとめたものが〈表1〉、採録された福沢諭吉伝記教材の一覧が〈表2〉³⁾である。

福沢諭吉伝記教材の採録数はⅠ・Ⅱ期では第一位、Ⅲ期でもファールブルに次ぐ第二位で、採録があったⅠ～Ⅲ期に限れば刊行された教科書の45%で採録されている。延べ採録年数でもファールブル、エジソン、宮沢賢治などの1.5倍近くあり、福沢がⅢ期までを代表する被伝者であ

ることは疑いない。昭和22・26年の学習指導要領（試案）で示された教材採録の観点には「(五) 文化の創造に寄与した人々の伝記およびその話」、「(十一) 自由・平等・博愛・平和・正義・寛容の思想の理解と発達を助けるもの」が挙げられていた。明治の近代化を主導し、独立・自尊・平等の思想を唱えた福沢の伝記は、こうした観点をふまえて採録されたと言えよう。

〈表1〉の上位にある人物の中で、野口英世などは一般伝記書の数や児童からの好感度も高いが、それに比べると福沢は教科書での採録数が突出して多い⁴⁾。これは、福沢が「教科書」という規範性をもった媒体に特有の被伝者であり、教科書における近代化の称揚という文脈の中で高く評価されたことを示唆している。なお、福沢諭吉の後継教材として採録されたのが「田中正造」であった。日本の近代化を主導した福沢

表1 戦後小学校検定教科書に採録された伝記教材で採録数上位の人物

人物	採録数	採録 出版社数	Ⅰ期 S24-35	Ⅱ期 S36-45	Ⅲ期 S46-54	Ⅳ期 S55-H3	Ⅴ期 H4-13	Ⅵ期 H14-22	Ⅶ期 H23-	延採録 年数
福沢諭吉	37	10	18	12	7					147
ファールブル	29	6	7	7	9	4	2			92
エジソン	25	9	12	8	5					94
キュリー夫人	23	4	9	4	6	4				85
野口英世	23	8	12	9	2					93
宮沢賢治	24	7	4	4	4	3	4	4	1	89
ヘレン＝ケラー	20	6	6		1	8	5			67
シュバイツェル	18	7	10	8						65
ダルガス	17	6	17							78
リンカーン	17	9	13	4						62
ガリレイ	16	5	9	4			3			57
コロンブス	16	5	13	3						63
ミレー	16	5	13	3						71
各項目の母数	計1,017	全13社	12社 39種	11社 25種	5社 15種	6社 21種	6社 18種	6社 11種	5社 5種	

* 「各項目の母数」欄は次の通り。

採録数：採録された教材の総数。出版社数：戦後に教科書を刊行した出版社の総数。

Ⅰ期～Ⅶ期：各期で伝記教材を採録していた教科書の総数。

表2 「福沢諭吉」伝記教材一覧

	出版社	教科書 番号	教科書名	学年	発行	終了	延年	単 元 名	教 材 名	形態		
1	学校図書	635	六年生の国語	6	26	35	10	(なし)	福沢諭吉	全伝		
		644	六年生の国語					日本の夜明け				
2	学校図書	520	国語 五年生	5	26	35	10	母の物語	母の力	抄伝		
		549	国語 五年生									
3	中教出版	680	国語の本	6	27	29	3	明るい日本	福沢諭吉	全伝		
4	教育出版	660	国語	6	27	35	11	伝記を読みましょう	福沢諭吉	抄伝		
		6-636	改訂 国語					伝記を読みましょう				
		698	小学国語									
		6-638	改訂 小学国語									
5	東京書籍	5-501	改訂 新しい国語	5	28	35	8	世のために	福沢諭吉	評伝		
6	広島図書	6-614	よいこの国語	6	28	30	3	国をおこす力	福沢諭吉	抄伝		
	大阪書籍											
7	大阪書籍	6-648	小学国語	6	29	35	7	作る喜び	学問の旗	逸話		
		A-615	改訂 小学国語									
8	大阪書籍	5-548	小学国語	5	29	35	17	辞書をひく	むかしの辞書	逸話		
		A-514	改訂 小学国語									
		5019	小学国語					36	45		辞書	諭吉と辞書
		5031	小学国語									
9	学校図書	4-455	小学校国語	4	30	35	6	こどものころ	母の力	抄伝		
10	大日本図書	4-495	国語	4	31	35	5	ことばの使い方	「だ」「です」 「ございます」	逸話		
	大阪書籍											
11	信濃教育会	A-600	国語	6	31	33	13	(なし)	波とうをこえて	物語		
		6021	国語								36	45
		6037	国語									
		6049	国語									
12	学校図書	6005	小学校国語	6	36	42	7	夜明け	太平洋を越えて	物語		
		6025	小学校国語									
13	三省堂	5018	国語	5	36	42	16	福沢諭吉	福沢諭吉	全伝		
14	教育出版	5008	標準国語	5	36	51	3	伝記 (なし)	福沢諭吉	全伝		
		5023	新版 標準国語									
		5042	新訂 標準国語									
		5041	新版 標準国語									
		5081	改訂 標準国語									
15	大日本図書	5033	小学校国語	5	40	42	9	国づくり	自由の火	抄伝		
16	東京書籍	6032	新しい国語	6	46	54	6	伝記を読む	アメリカへわたる - 福沢諭吉の自伝から	抄伝		
		6062	新訂 新しい国語									
		6132	新編 新しい国語									
17	光村図書	6051	小学 新国語	6	46	51		人物の考えや業績 を読み取ろう	福沢諭吉	全伝		
		6101	小学 新国語									

から、近代化の弊害である公害問題を主題とする田中正造へ教材が交替したことは、この時期以降、近代化を全肯定しない傾向が強まったことを象徴している⁵⁾。

I期の教材では、福沢の生涯を記した全伝もあるものの、特定の逸話や主要業績のみを扱う抄伝や逸話の採録が相対的に多い。一方、II期以降の採録教材では全伝が増えるとともに、咸臨丸での渡米を題材とする物語の割合が増えている。単元の設定も、I期までは単元名に主題が示され、他の教材と福沢の抄伝や逸話とを併せて組まれた単元が多いが、II期以降では福沢の伝記を単独で扱う単元が中心となっている。

3. 国語教科書における福沢諭吉の評価

教科書の中で福沢の業績や人間性のどのような点が肯定的に受容されたかは、なぜ福沢諭吉が多く教材化されたかを考える有力な手がかりになる。そこで本節では、教材や指導書での記述を中心に、小学校国語教科書における福沢の評価を検討する。

教科書における福沢の肯定的評価は、大きく三つの点についてなされている。

第一は、明治維新时期において近代国家を実現するために尽力した思想的指導者であった点である。たとえば、「日本文明の父」(教材6)⁶⁾、「偉大な明治の先覚者」(教材8)などの表現は、近代国家建設に貢献した偉大な先達として福沢を位置付けている。また、「新しい日本が生まれようとした明治の初め、古くからの悪いしきたりを打ち破り、明かるくて自由な世の中をつくろうと努力した人」(教材2)、「日本の教育や、政治や、産業に、新しい考えを入れて、日本の発達のためにつくした。」(教材3)といった記述もある。これらは、「古くからの悪いしきたり」である封建制に基づく身分制社会を否定し、新しい「明かるくて自由な世の中」に変革していくことを「日本の発達」ととらえ、そのため

に福沢が尽力したことを評価している。

こうした評価は、教科書内における福沢の伝記の位置付けにも反映している。「日本の夜明け」(教材1)、「明るい日本」(教材3)、「国をおこす力」(教材6)、「夜明け」(教材12)、「国づくり」(教材15)などの単元名に示されるように、これらの単元では近代国家を作るための苦勞や努力を学習者に知らせることで、戦後復興期の課題であった民主主義国家の建設に寄与する考え方を学習者に育てることが主題となっている。福沢の伝記教材はこうした単元の内におかれ、他の教材と組み合わせられて学習者に提示される。そうすることで、日本の近代化過程における彼の思想や言動の重要性が前面化される。言い換えれば、戦後復興期を支える思想や人格をもった学習者を育てるため、学習者に培いたい思想や人格のモデルとして福沢が示されるのである。たとえば、「伝記を読みましよう」(教材4)の主題は次のように記述されている。

福沢諭吉、フランクリンの二人は、ともに国家の黎明期に当り、民主主義思想の具現者として、多くの啓蒙的業績を残し、国家社会の進歩に寄与した人である。このような偉人の伝記を感激を以て読むことにより、平和的民主社会建設の基礎的資質を培うことができよう⁷⁾。

この記述は、福沢諭吉という一個人の伝記に教育的意義が求められたわけではなく、「民主主義思想の具現者」の伝記を共感的に読むことを通して「平和的民主社会建設の基礎的資質を培うこと」が本教材の主旨であったことを示している。

特に昭和20年代では、憲法精神や民主主義と福沢の思想とのかかわりも強調される。「国民の基本的人權を認めることは、新憲法の本質であるが、諭吉のこのことば（「天は人の上に人を造

らず人の下に人を造らず」：筆者注）に、すでにその芽ばえを見いだすことができよう。」（教材1）、「福沢諭吉は、それらの広い知識をもとにして、旧来の悪い習慣を否定し、民主主義の基礎を固めて、新しい日本の先覚者となったのです。」（教材4）など、福沢の思想の価値は新憲法の本質や民主主義の基礎となっている点であり、民主国家の建設が最優先された戦後初期の要請に応えるものであったことに見いだされている。

一方、昭和30年代以降の教材では、教材内において福沢を評価するこのような記述自体が少なくなっている。復興が進むにつれ、戦後初期に要請された近代民主国家の構築という命題が変化し、福沢を近代化に貢献した思想的指導者と位置づける視点が後退しているのである。その中で、第二の評価として、近代的な考え方を人々に啓蒙し広めた「国民の教師」という側面が取り上げられるようになる。たとえば、「日本の国民に、新しい時代の考え方・生き方を教えたのである。」（教材13）、「時代の先覚者、国民の教師」（教材17）といった記述は、福沢自身が近代化に貢献したこととともに、それを広く人々に伝えたこと、つまり教育の重要性が取り上げられている。

三点目は、困難を乗り越えて日本の近代化という目標に立ち向かった人物であるという点である。Ⅰ期の教材では、渡米や訪欧は単なる「海外への視察」としてしか記述されなかった。一方、Ⅱ期以降では咸臨丸での渡米を物語化して逸話として扱う教材が増え、この逸話自体に意味が見いだされている。たとえば、「波とうをこえて」（教材11）について、指導書ではこの逸話を次のように意味づけている⁸⁾。

六年生はすでに歴史的意識にめざめ、世界的視圏も拡大してきている。そして、読み物の傾向も伝記への興味が増し、しょう

がいの師として先人に親しむほどの時期にもなっている。このときに日本の歴史的背景をになって民族意識にめざめた人々の伝記を読み、偉大な先人の努力や不屈の魂に接し、その生き方にふれることはきわめてたいせつなことである。

ここでは、近代化に対する福沢の功績だけではなく、困難に立ち向かう「努力」や「不屈の魂」という人間性の部分が肯定的に評価されているのである。

福沢諭吉は、戦後初期には民主主義国家の再建をめざそうとする志向のもと、その思想の礎を築いた先達として評価されてきた。一方、復興が進むともなって国家再建という命題が後退するにつれ、福沢の位置づけは近代化の先覚者としての側面だけでなく、そうした思想をより広く人々に啓蒙した人物、あるいは困難を乗り越えて世界に飛び出そうとした人物という側面が評価されるようになっていく。

4. 福沢諭吉伝記教材に取り上げられている伝記的事実の検討

伝記の教材化にあたっては、底本となるテキストから造型したい人物像に合わせて特定の逸話や事実を抜粋し、リライトするという加工が施される。したがって、底本となっている『福翁自伝』からどのような逸話や伝記的事実が選択されたかを検討することで、教材が福沢をどのような人物として描こうとしたかを考察することができる。そこで本節では、どの時期にどのような伝記的事実や逸話が教材化されたかを検討する。

〈表3〉は、各教材で記述されている福沢の伝記的事実を一覧化して示したものである。また、〈表4〉は、各教材で取り上げられている逸話の一覧である。

福沢は、幼年期から20歳までを中津で過ごし

た後、長崎に遊学、22歳で適塾に入塾し、25歳で上京した。咸臨丸での渡米は27歳、慶應義塾の開塾は35歳、死去したのは68歳であった。

〈表3〉〈表4〉によると、教材の記述の多くが青年時代までに偏っており、上京後、特に慶應義塾開塾後はあまり取り上げられていない。特

表3 福沢諭吉伝記教材で取り上げられている伝記的事実

教材番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
家族・環境	誕生	○		○	○	○				○		○		○	○			○
	出生地(大阪)	○		○	○					○				○	○			○
	兄弟構成(兄と三人の姉)		○	○	○					○				○	△*1			○
	中津藩	○	○	○	○	○	○			○		○		○	○	○		○
	身分(武士の子)	○																
	(身分の低い武士の子)						○									○		○
	(貧しい武士の子)												○					
	父は大阪の葎屋敷勤めだった	○			○											○		○
	父が漢学者であった														○	○		○
中津	父の死	○	○	○	○		○			○				○	○	○		○
	中津に帰藩する	○	○	○	○					○					○	○		○
	貧窮の生活を送る	○	○	○	○	○	○			○				○	○	○		
	母の苦勞		○	○	○		○			○				○				
	手先が器用だった			○			○							○				
	14, 5才の頃から漢学を始める			○		○	△*2							○	○			
長崎	長崎に遊学する	○		○	○	○						○		○	○	○		○
大阪	適塾で学ぶ	○		○	○	○	○		○			○		○	○	○		○
	兄の死													○	○			
	適塾の塾長になる	○												○	○			○
江戸	江戸に蘭学塾を開塾する	○		○		○	○		○			○		○	○			○
	英学を志す	○		○	○		○		○			○		○	○			○
	咸臨丸で渡米する	○		○	△*3		○		△*4			○	○	○	○		○	○
	幕府外国方に勤める	○													○			
	幕府通訳として渡欧する	○		○	△*3		○		△*4					○	○			○
	『西洋事情』を出版する	○	△*5	○	○				△*4					○	○			○
	再び渡米する	○		○	△*3				△*4									○
	慶應義塾を開塾する		△*5	○	○			○	△*4							○		○
	刀剣を売り払う	○																
	『学問のすすめ』を出版する		△*5	○		○			△*4					○	○			○
	「時事新報」を発刊する			○	○				△*4						○			○
	死去		○											○	○			○

*1 諭吉には兄と三人の姉があったが、「兄、ふたりの姉、諭吉」と記述されている。

*2 「十二才の頃」となっている。

*3 「さらに、アメリカやヨーロッパへも行って、西洋の進んだようすも、じっさいに見てきました。」

*4 「何回となく海外の視察に行き、おう米の各国のようすを、よく研究した。そして、国民のために、たくさんの本を書き、学校を建て、新聞を出し、六十七年の全しょうがいを新しい日本の建設にささげた。」

*5 「独立自尊の旗をかかげ、西洋の新しい文化をとりいれ、大学をつくり、たくさんのお書物を書き、新しい日本を導いていったのです。」

にI期教材では少年期の逸話が相対的に多く取り上げられる一方、長崎遊学以降については逸話が少なく、業績についての記述が多くなっている。

I期の教材では、大成する人物がどのような少年期を送ったかを具体的な事例や物語で描き、それをモデルとして規範的少年像が提示されている。福沢の場合、中津での少年期を中心に、貧しい生活の中で学問にいそしんだことを示す逸話が頻繁に取り上げられる。長崎遊学時や成

人後も含めると、苦勞しながらも熱心に学ぼうとした向学心に富む福沢の様子を伝える逸話が8話と最も多い。勉学の重要性、特に幼少期において学ぶことの大切さを学習者に示そうとする意図が感じられる採録である。たとえば指導書では、少年期の逸話を提示することの意義について次のような記述が見られる⁹⁾。

本単元では、偉人の少年少女時代に関する伝記を掲げている。すなわち、児童自身

表4 福沢諭吉伝記教材に取り上げられている逸話

	番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
大阪	名前の由来			○												○			
	父は諭吉を坊主にしたかった	子を思う心		○									○			○			○
	父、代金の不足を返す	清廉		○								○							
中津	井戸に落ちた鍋をつり上げる	器用				○		○							○				
	家事の手伝いをする	孝行			○	○													
	昼間に買い物に行く	独立自尊			○	○		○											○
	母、乞食の虱をとる	平等		○								○							
	君主の反故を踏む	封建制批判																	○
	稲荷の巫女をやりこめる	合理性						○											○
	左伝を通読し、暗記する	向学心				○	○		○										
	せまい勉強部屋	向学心					○		○										
あんまを習う	独立自尊			○															
長崎	遊学にあたっての兄との会話	向学心				○													
	長崎での生活	向学心																	○
	母の病気の手紙																○	○	
大阪	適塾での生活	向学心												○					
	ズーフ部屋で勉強する	向学心									○								
	鉄に錫をめっきする	合理性	○																
	物理書を筆写する	意志	○																
	町人を試す	平等											○						
江戸	横浜で英語に出会う	向学心						○					○		○	○			○
	英語を求めて奔走する	向学心	○					○					○			○			○
	咸臨丸で渡米する												○	○		○			○
	刀剣を売り払う	平等																	
	戦争時も授業を続ける	学問の自立							○	○						○	○		○

の目を外へ向けさせ、偉人のこども時代の環境や生きかたを知らせることによって、また児童自身の生活態度への反省の機会をもたせようという意図である。

また、乞食にも平等に接する母の逸話「乞食の虱をとる」や、父の清廉さを示す「父、代金の不足を返す」など、両親の美德が論吉の人間形成に強い影響を与えたことを示唆する逸話が4話ある。福沢の人格形成に際して両親の人物が大きく影響したことが説かれており、少年期における両親の大切さが提示されていると言えるだろう。

向学心を示す逸話に次いで多いのが、封建制や身分制度に反発し平等思想を体現する逸話である。福沢の言動や思想だけでなく、前述の「乞食の虱をとる」のような母の逸話もあり、6話が採録されている。平等思想や実証主義・合理的精神は近代を支える思想・思考である。逸話の採録状況は、近代の先覚者として福沢を造型するとともに、そうした思想が幼少期から形成されていたことをも示している。

咸臨丸での渡米については、記述自体はI期にも見られるが、逸話として主に取り上げられるのはII期以降である。渡米の逸話が前面化されるにつれ、少年期の記述は簡略化される傾向が強くなっている。福沢の評価が、戦後復興期に要請された民主主義の思想的指導者から、世界に進出しようとする進取の気性に富む気概を持った人物へと変容したことの現れであると言えるだろう。咸臨丸での渡米の逸話では、嵐を乗り切ってアメリカにたどり着くという構成が取られることが多い。困難の克服と日本の近代化を重ねるとともに、国内にとどまらず広く海外へ向かおうとする志向も前面化されている。

5. 福沢論吉伝記教材の記述の検討

前節でも指摘したように、伝記教材では筆者

の意図に即して伝記的事実の選択や記述のリライトが施される。教材のリライトは、その教材で被伝者をどのような人物として描こうとしたかを反映している。そこで本節では、『福翁自伝』と比較しながら教材の記述の様相を検討し、教科書教材が描こうとした福沢論吉像を考察する。

5.1 勤労孝子

父を早くに亡くした福沢が貧窮の中で少年期を送ったことは、少年期を描いた教材すべてに書かれている。その中で、福沢少年は母を助ける孝子として造型されることが多い。たとえば次の記述には、修身教科書に近い勤労孝子像が鮮明に見られる。

論吉は、小さなときから、元気で、よく働きました。(中略)少し大きくなると、水くみ・米とぎ・まきわりなど、すすんで、家の手伝いをしました。そればかりでなく、貧しいくらしを助けるために、げたを作って売ったり、刀のさやに色をぬって、謝礼をもらったりしました。

「どんなしごとをしても、決していやしいことはない。いやしいのは、行ないや考え方にある。」と思って働いたのです。そうして、ひまをみては、一心に勉強をしました。(教材4)

このほかに教材3・4・6・13・14にも「家の手伝いをした」「母を助けた」といった記述が見られる。このように、少年期を描くにあたって、福沢は家族を助けてよく働き、生活を支える勤労孝子として造型されている。

5.2 両親の影響

両親の思想や人格が福沢の人間形成に強い影響をもったことを重視する教材の傾向は、逸話

の選択にも表れていた。ここでは、具体的な記述に即して、教材における両親の位置付けを検討したい。

たとえば「乞食の虱をとる」において、母の行動に対する諭吉の気持ちは次のように記述されている。

いやな顔を少しも見せないで、かえって楽しそうに「たけ」の世話をしているおかあさんのようすを見た諭吉は、あたたかい思いやりの心にうたれてしまいました。
(教材2)

ところが、福沢自身は乞食の虱をとるという母の行為を必ずしも快く思っていなかったようである。この逸話について、『福翁自伝』の記述は次のようになっている。

ここに誠に汚い奇談があるから話しましょう。(中略)これは母の楽しみでしたろうが、私は汚くて汚くて堪らぬ。今思い出しても胸が悪いようです¹⁰⁾。

『福翁自伝』では、福沢が母の言動に「思いやりの心」や平等の思想を感じ取ったという記述はない。一方、教材2では、「乞食の虱をとる」という母の行動は人間味に満ちた行為と意味づけられ、それが少年福沢に伝わることで福沢の人間性が高まったという構図に改作されているのである。こうした母の人徳と影響を示す記述は、例えば次の教材にも見られる。

「おかあさんがはずかしいと思うのは、貧ぼうをはずかしがるいやしい心です。じぶんのしていることを、人に見られまいとする、いじけた心です。」
「じゃあ、人は、何をするにも、真正面を向いて、生きていけばいいのですか。」

「そうです。あなたがそうして生きていくには、だれに見られてもはずかしくないような行ないをしなければなりません。正しい行ないをして一生を過ごすのが、ほんとうの人間です。」

母のこのことばは、諭吉の心を強くうちました。
(教材4)

これは「昼間に買い物に行く」という逸話で、見栄を張って夕方にこっそりと酒などを買いに行く武士を見た後の親子の会話の部分である。貧しいことを恥じる武士を母は「いやしい心」と批判する。そして、貧しさに卑屈にならない母の矜持が福沢の思想に受け継がれたことが提示されるのである。しかし、この会話は『福翁自伝』にはない。母の人徳が子どもに強い影響を持つのだということを強調するための、教材における創作であると思われる。

このような福沢の思想形成に関わる両親の影響の記述は、I期の教材にのみ見られる。これは、戦後初期において、よい家庭環境がよい子どもを育てるという命題が、伝記教材を通して提示されていたことの表れであろう。

5.3 独立自尊の思想

「独立自尊」の思想は、福沢の思想の基盤であり、時期を問わず記述されている。ただしI期教材では、そうした思想が少年期に形成されたものとして、前述の逸話「昼間に買い物に行く」(教材3・4・6・17)と合わせて記述される場合がある。たとえば、教材3・4では、昼間でも堂々と買い物に行く福沢の行動について、次のような理由付けがなされている。

人間が、自分で働いたお金で買い物をするのに、なんのはずかしいことがあろう。

(教材3)

人は正しい道を歩まなければならない。正

しい行ないをしていて貧ぼうなのは、決してはじめではない。(教材4)

一方、福沢が日中でも恥じることなく買い物に行く理由について、『福翁自伝』では次のように記述されている。

銭は家の銭だ、盗んだ銭じゃないぞというような気位で、却って藩中者の頬冠をして見栄をするのを可笑しく思ったのは少年の血気、自分独り己惚っていたのでしょう¹¹⁾。

『福翁自伝』では「少年の血気」とされている福沢の心情が、教材では自らの行動を恥じない自尊感情の表れとして記述されている。福沢の思想の基礎をなす、自らの行いを律して恥じないように生きるという思想は少年期から形成されていたことが、強調されているのである。

また、独立自尊の思想を国家の独立にまで広げてとらえている記述は、教材5・14・17である。

「国の独立と真の文明は、ひとりひとりが強い信念を持ち、自分の行ないに責任が持てて、初めてうちたてることができるものである。」(教材14)

人間の独立とともに国の独立を説き、日本の独立は、日本国民の文化を進めるほかはないと強調した。(教材17)

教材5の記述はあるものの、福沢の思想として国家を論じる記述は主としてはⅢ期以降のとらえ方であるといえる。

6. おわりに

福沢論吉伝記教材は、戦後初期においては、民主国家建設をめざし、それに寄与する考え方を子どもに育てるという大目標のもと、日本に

近代国家を築こうとした指導者・先覚者として福沢を位置付けてきた。福沢の生き方や思想が、めざすべき民主国家に向かおうとする人間のモデルとして提示されていたのである。この時期に福沢論吉を通して提示された規範性の特徴は、以下のようにまとめられる。

- ① 家族を助けてよく働くこと。勤労と孝行の重要性。
- ② 思想や人間性の形成における両親の影響の大きさと大切さ。
- ③ 向学心を持って、学問に精進すること。
- ④ 科学的・合理的な思考。
- ⑤ 平等・博愛といった思想を持っていること。

復興がある程度達成された後の高度成長期においては、これに次のような要素も付加される。

- ⑥ 強い信念を持ち、困難に立ち向かう不屈の精神。
- ⑦ 日本国内にとどまらず、世界へ進出していこうとする進取の気性。

戦後初期においては民主国家の建設を成し遂げるための考え方や人間性のモデルとして、高度成長期には諸国に進出し世界と渡りあおうという日本人の気概を象徴する人物として、福沢は採録され続けたと言える。一方で、公害の社会問題化など、近代化がもつ様々な問題が顕現化し、近代を全肯定する文脈が機能しなくなったとき、福沢は国語教科書から退場していった。福沢論吉は、近代国家の再建を担う子どもを育てるといふ文脈を教科書が抱えていた時代の中で高く評価された人物であったといえることができる。

注

- 1) 本稿で扱う「伝記教材」とは、「教科書上で伝記として分類された教材だけでなく、実在する人物の業績や言動を提示している教材全般」（幾田（2012），p. 215）を指すこととする。
- 2) 幾田伸司（2012），p. 221
- 3) 〈表2〉に関する注記は次の通り。
*教材の採録が継続している場合、教科書ごとの発行・終了年度は省略している。
*「形態」欄の「全伝」は生涯にわたる伝記を描いてあるもの、「抄伝」は特定の時期や逸話を中心に描いてあるもの、「逸話」は一つの逸話のみを取り上げているもの、「評伝」は福沢の思想を述べるに際して伝記を援用しているもの、「物語」は咸臨丸の渡米を題材とする物語の中に福沢の伝記が挿入されているものとした。
- 4) 群馬県高崎市立中央小学校（1960），唐沢富太郎（1964）によると、野口英世、二宮金次郎、リンカーン、エジソンなどは、一般伝記書の数が多く児童の人気も高い被伝者であった。福沢の一般伝記書数はこれらの人物に次ぐが、小学生が偉いと思う人物には入っていない。
- 5) 田中正造の伝記についての考察は、幾田伸司（2011）参照。
- 6) どの教材からの引用かなどを示す場合は、〈表

2) 中の番号で示すこととする。

- 7) 教育出版（1956），p. 85
- 8) 信濃教育会（1961），p. 139
- 9) 学校図書（1956a），p. 68
- 10) 福沢諭吉（1899/1978），pp. 21-22
- 11) 福沢諭吉（1899/1978），p. 18

参考文献

- 幾田伸司（2011）小学校国語教科書の中の「田中正造」, 『語文と教育』, 第25号, 鳴門教育大学国語教育学会, pp. 26-39
- 幾田伸司（2012）戦後小学校国語教科書における「伝記」教材の変遷, 『鳴門教育大学研究紀要』, 第27巻, pp. 215-224
- 学校図書（1956a）『増補改訂 小学校国語四年上下教師用書』
- 学校図書（1956b）『六年生の国語 上下 指導書』
- 唐沢富太郎（1964）『理想の人間像』中公新書
- 教育出版（1956）『藤村作編「改訂国語」学習指導書 - 小学六年教師用 -』
- 群馬県高崎市立中央小学校（1960）『伝記書の分析と指導』, 全国学校図書館協議会
- 信濃教育会（1961）『国語 六年上・下 指導書』
- 福沢諭吉（1899/1978）『新訂 福翁自伝』, 岩波文庫